

[国 語]

情報活用力を高める説明的文章の指導

- 要点・要約の学習を情報活用場面につなげる試み -

寺田 武文*

1 主題設定の理由

新聞、インターネット、テレビ、書籍など様々なメディアを通して、大量の情報がやりとりされる現代において、情報活用力は、社会の中でよりよく生きていくために不可欠なものである。高度情報化社会を生きていくためには、大量の情報の中から必要な情報を選び出したり、内容を的確に把握したりする能力が必要だからである。

情報活用力を高めるために、とりわけ国語科では、「文章から知識、情報を獲得するための方法を身に付けること」や「目的に応じて、音読や黙読、速読や比べ読みなどさまざまな読み方を適宜用い」たり、「中心語句や段落に気をつけながら内容の中心を押さえたり、接続語などに着目したりして、筆者の述べ方を読み取る指導を工夫する」ことが大切になってくる。そうした力を高める手段の一つとして、説明的文章の指導では文章の要点をとらえたり、ひとまとまりの文章を要約したりする指導が行われてきた。

要点を捉えたり、文章を要約したりする学習は、文と文との関係、段落と段落の関係を読み取る事を基本とし、文章のポイントを確実に押さえる確かな読みの力を育成するものである。例えば、まとまった文章の中からキーワードを探したり、文末表現から筆者の考えを推測したりしながら、中心となる文を見つけていくことである。このように、要点・要約の学習は、大量にあふれる情報の中から必要な情報を選び出し、活用していく力を身に付けるために不可欠なものである。

これまで説明的文章を「読むこと」の指導については、「書くこと」と関連付けた実践が多く報告されている。「書くこと」と関連付けることで、「読むこと」の目的が明確になり、児童にとって必要感がある学習活動が展開される。また、「読むこと」と関連づけることで、文章の構造上の特性を「書くこと」の指導に生かすことができる。両者が連携することで、指導の効果が上がることは、様々な実践から報告されている。

富永(2007)は、「説明的文章を繰り返し読み込み、確かに表現する活動を通して、文章表現の技能を身につけることができた。」としながらも、「様々な資料を活用した情報活用能力の育成」が十分ではなかったと述べている。さらに、児童が書いた説明文の論述の情報が、「体験的情報などが中心」であり、「他の文章、図表などの資料」が乏しく、「情報を活用する学習場면을計画的に設定していく必要がある。」¹⁾と述べている。説明的文章の特性を生かして情報活用能力を高めるためには、情報活用場面としてどのような活動を準備し、単元の中にどのように位置づけていくかが問われている。

このような考えに基づき、本実践では、説明的文章において要点をとらえたり、文章を要約したりする指導を軸としながら、情報活用場면을単元の中に位置付けることによって、情報活用力を高めていきたいと考える。

2 研究の目的

説明的文章の指導において、要点をとらえたり、文章を要約したりする指導には、どのような手立てが有効か。また、要点、要約の学習で獲得した言語技能が、情報活用場面でどのように活かされるか検証する。

3 研究の方法・内容

(1) 要点・要約の学習における典型例の抽出と言語技能の検証

自分が選んだテーマについて情報を集めて新聞形式でまとめるという目標を設定して、国語の説明文教材「谷津干潟の生き物たち」の学習に入る。新聞形式での表現活動に必要な技能として、文章を読んで要点をとらえたり、キー

* 川口町立川口小学校

ワードを落とさずに要点をまとめたり、段落に見出しをつけたりする力を身に付けさせていく。学習過程の中で、児童がまとめた要点や要約文の典型例を拾い出し、教師の働きかけと児童が獲得した言語技能との関連に付いて考察する。

(2) 情報活用場面として新聞形式による「書く」活動の設定

「新聞」という表現形式は、「書くこと」が苦手な児童でも、自分なりに紙面の使い方を工夫しながら、その活動に親しむことができることから、国語以外の教科・領域の中でも、多く利用されてきている。しかし、ややもすると言語技能としての価値がはっきりしないまま、形式だけを真似た活動になってはいないだろうか。「新聞」という表現活動では、様々な情報源から、必要とする情報を読み取ったり、限られたスペース、文字数の中で的確に伝えたり、記事の内容の要点を「見出し」という形で短くまとめたりする力が必要となる。これらは、要点・要約の学習によって身に付けた言語技能と深く関わるものであると考える。こうした理由から、情報活用場面として新聞形式による「書く」活動を設定する。新聞を「書く」活動の中で、要点・要約の学習によって付けた力がどのように活かされたか検証する。

4 実践の概要

(1) 単元名および対象児童

大事なことを選んで伝えよう「谷津干潟の生き物たち」 対象児童 5年生 33名(男子12名 女子21名)

(2) 単元の目標

- ◎まとまった文章を読み、筆者の意図をくみ取りながら要点をまとめることができる。
- 情報の中から必要なことを選び取り、必要な形にまとめて表現することができる。

(3) 指導計画(全16時間)

- ・小学生新聞を読み、新聞の表現形式や文章の特徴を学ぶ。(2時間)
- ・説明的文章教材「谷津干潟の生き物たち」を読み、学習計画を立てる。(1時間)
- ・形式段落ごとに要点のとらえかたについて学習する。(3時間)
- ・意味段落ごとに要約の仕方を学習する。(3時間)
- ・文章全体の構造をとらえ、筆者の主張をまとめる。(1時間)
- ・調べたいテーマにそって情報を集める。(1時間) ※総合的な学習の時間と連携を図る。
- ・新聞の形式に沿って紙面の割り付けを考え、記事にまとめ見出しをつける。(2時間)
- ・見出しに合わせて新聞形式で記事を書く。(2時間)
- ・互いの新聞を読み合い、感想を交流し合う。(1時間)

(4) 指導の実際

① 小学生新聞を読み、「新聞」の表現形式のよさ、特性を実感する

本単元では、説明的文章の読みによって高めた要約力を実践的な場面で生かすため、総合的な学習の時間の学習と関連付けながら、各自がテーマを設定して新聞作りに取り組みさせることにした。そこで、単元のはじめの段階で、小学生新聞を読み、新聞のおもしろさや良さに触れ、新聞の表現形式について学習することにした。小学生新聞は、一般紙と異なり、児童向けに記事が選定されている。また、文字の表記も児童向けに作られているので、元々、読むことが苦手な児童でも、抵抗なく楽しく読むことができる。小学生新聞は、様々な新聞社から発行されている。その中から、日時を指定して必要部数を購入することが可能であることから、毎日新聞社が発行している「毎日小学生新聞」を利用することにした。まずは、1人1部ずつ新聞を配付し、時間をかけてじっくり読む時間をとる。その後、新聞の表現の特徴について気がついた点をワークシートに書かせ、全体で話し合った。紙面の「割り付け」、「見出し」、「文体」、「文末表現」、「資料の活用」などたくさんの気づきがあった。ここでの気づきは、第二次で新聞を書く活動に役立っている。

② 形式段落で要点の意味や要点のまとめ方を具体的に学ぶ

学習計画に沿って、説明文による学習に入る。本文を通読し、文章全体の大意をつかみ、初めに読んだ感想を交流した後、まずは、形式段落の要点をつかませる指導に入る。教科書の資料編を活用して要点という用語について指導

し、最初の形式段落で要点をまとめる方法を一斉学習で行う。

要点のまとめ方について、白石範孝は、「要点指導の手順」²⁾として、【図1】のような方法を示している。

白石氏の示す「要点指導の手順」

- 1 形式段落が、いくつの文でできているのかを調べる。
- 2 中心となる大切な文を見つける。
何をもって大切と言えるのかを明確にするため、次のような視点でとらえさせる。
 - ・それぞれの文の役割を考えさせる。
 - ・それぞれの文の中から、結論が述べられている文を見つける。
 - ・形式段落内の主語と述語からみつける。
- 3 短い文にまとめる。
さらに効果的な表現方法として次の2点をとらえさせる。
 - ・主語、述語、キーワードを見つけさせて文にする。
 - ・文末を体言止めにする。(後で意味段落をとらえたり、文章全体の構成をとらえたりしやすくする。)

【図1 要点指導の手順】

上記の1～3の手順で要点のまとめ方を指導したあと、全体で形式段落①について要点をまとめることにした。いくつの文でできているかは、すぐに分かるが、中心となる大切な文については、意見が分かれることが予想させるため、話し合わせた。児童はこの形式段落は、「谷津干潟」を主語として語られていることに気づいた。そして、最後の文が中心になるという意見が大勢を占めた。そこで、最後の文の中で、「生き残っている」という言葉に着目させ、文章の中で落とすことのできない大切な役割を果たしている言葉として、「キーワード」という言葉を指導した。そして、その他にもキーワードになる言葉に線を引かせ、要点をまとめさせた。【図2】は児童がまとめた要点である。

〈本文〉 形式段落①

東京湾のおくに、谷津干潟とよばれる小さな干潟があります。一日に二回、海水が満ちたり引いたりする自然の海です。昔、東京湾には大きな干潟が広がっていましたが、そのほとんどがうめ立てられてしまい、ここだけが生き残っているのです。

A児 海水が満ちたり引いたりする谷津干潟。

B児 東京湾のおくに小さな干潟がある。ここだけ生き残っている谷津干潟。

C児 大きな干潟が広がっていたが、ほとんどがうめ立てられてしまった谷津干潟。

D児 谷津干潟は自然の海で、東京湾には、昔、大きな干潟があったが、ほとんどうめ立てられ生き残った谷津干潟。

E児 一日に二回、海水が満ちたり引いたりする自然のままの谷津干潟。

F児 ほとんどがうめ立てられたのに生き残った谷津干潟。

【図2 形式段落①と児童がまとめた要点】(*下線部はキーワード。太線部は、児童が言葉を置き換えた箇所。)

A児は、中心となる文をとらえていない。B児は、2文になってしまっている。こうした児童には、もう一度、要点の意味や、まとめ方としての基礎を指導した。C児は、言葉を省略したことによって、誤った解釈がなされる虞れがある。要点は、言葉を省略する作業でもある。注意しないと、文章本来の意味内容が損なわれたり、間違っただけを伝えたりすることになりかねない。D児は、「谷津干潟」という言葉が2回繰り返し出ているだけでなく、多くの情報を盛り込もうとしたために、要点が伝わりにくくなってしまっている。このように、中心となる文が分からないために、文章を短くまとめることができない児童は、少なくなかった。E児とF児は、波線部分のように、言葉の言い換えが行われている。要点をまとめる作業では、意味内容を損なわずに別の言葉や言い方に置き換えることが重要な言語技能となる。E児とF児の表現については、よい例として児童に紹介した。また、中心文以外から自分なりにキーワードを付け加えているものについて、「さらに効果的な表現方法」として紹介した。

このようにして、児童が書いた要点の中から、間違いが多かった典型例や言語活動の技能として手本となるものを取り出した。そして、それらを模造紙大に拡大したものを提示し、児童の名前は伏せて、全体で話し合い、改善すべき点や今後活用してほしい点などを確認していった。この後、理解を深めるため、形式段落②も全体で要点のまとめ方を練習し、残りの形式段落は、各個人でまとめることにした。

③ 意味段落で文章を要約する方法を学ぶ

形式段落ごとの要点のまとめ方について学習した後、今度は、意味段落を要約する学習に移った。要約とは、文章全体のあらましをまとめることであり、それぞれの段落の要点をつなげて文章化するものである。

まず、意味段落（一）の文章を音読してから、「谷津干潟はどんなところかまとめよう。」という課題を提示し、ワークシートを配付した。ワークシートは、上半分に本文をのせ、下には、文字数が分かるように100字のマス目が入ったものを入れた。要点をまとめる文字数としては、吉本清久が示した「要約力を培う基礎・基本系統表」を参考にして、80字から100字の間でまとめさせた。ここでも、キーワードに線を引かせることで、それぞれの段落の要点を落としていないか確かめたり、文字数の見当をつけさせたりすることができた。

児童の要約文の例				意味段落（一）〈全文〉
J児	I児	H児	G児	
<p>東京湾のおくに、一日に二回、海水が満ちたり引いたりする自然のままの谷津干潟がある。一年じゅうたくさんおのしぎや千鳥が見られるが、そのほとんどがうめ立てられて、ここだけが生き残っている。</p>	<p>東京湾のおくに、小さな自然の干潟があって、昔、大きな干潟が広がっていたけれどうめ立てられて、ここだけ生き残っている。一年じゅうわたり鳥がたくさん訪れて、二千羽を数えることがある。</p>	<p>東京湾のおくに谷津干潟とよばれる自然のまの干潟がある。昔、東京湾には、大きな干潟が広がっていた。でも、ほとんどがうめ立てられて、ここだけが生き残っている。</p>	<p>東京湾のおくに、谷津干潟と言う小さな干潟がある。昔は、大きかった干潟がうめ立てられてここだけが生き残っている。一年中、たくさんおのしぎや千鳥が飛んできて、多い日は、約二千羽を数えることがある。</p>	<p>①東京湾のおくに、谷津干潟とよばれる小さな干潟があります。一日に二回、海水が満ちたり引いたりする自然の海です。昔、東京湾には大きな干潟が広がっていましたが、そのほとんどがうめ立てられてしまい、ここだけが生き残っているのです。 ②谷津干潟には、一年中、たくさんおのしぎや千鳥が飛んできて、歩き回ったり、えさを食べたり、休んだりしています。特に、三月から五月、九月から十一月には、たくさんおのしぎや千鳥が見られ、多い日には、約二千羽を数えることができます。</p>

【図3 意味段落（一）の要約文】

【図3】は意味段落（一）の要点をまとめたものである。要約文の例の棒線部分は、児童自らキーワードとしてサイドラインを引いた箇所である。また、網掛け部分は、サイドラインを引いた言葉を、自分なりに言い換えて用いている箇所である。さらに、サイドラインを引いていない箇所についても、短くまとめるために文節のつながりや文末表現を言い換えて表現する部分が多く見られた。要約の仕方については、個々の児童で様々な個性があり、その中で典型的なものを以下に例として挙げる。

G児は、形式段落①、②から中心となる文を落とさずにまとめることができた例である。H児は、キーワードとして選んだ語句を中心に、途中、言葉を省略しながらまとめているが、形式段落①のみしか含まれていない。こうした児童はごく少数であったが、形式段落と意味段落の違いに気付かせ、段落ごとの要点をまとめる必要があることを指導した。I児は、前半部分の主述の関係があいまいである。J児は、たくさんおのしぎや千鳥のキーワードに線を引き、それを何とか文章にまとめ上げたが、内容的に誤りが生じている。こうした誤りは、主述の関係が正しく捉えられていないだけでなく、中心となる文を的確に捉えられていないために起こるものと考えられる。このような、考えから、前時の要点をとらえる指導も踏まえながら、どうしたら筆者の伝えたい事を損なわずに、要領よくまとめられるか話し合い、次の点を確認した。

- ・段落の中で中心となる文を決める。
- ・段落の役割や中心となる文をもとにしながら、「キーワード」を絞り込む。
- ・書いた後、もう一度本文と読み比べ、内容や主述の関係に誤りがないか確かめる。

この後、ワークシートを配付し、意味段落（二）の要約を各自で行った。意味段落（二）については、教科書の本文を使って、キーワードに線を引きながら、学習を進めていった。その時の評価は、【図5】に示した。

④ 情報活用場面としての新聞形式による表現活動

第二次の段階である。要点・要約の学習で付けた力を生かして新聞作りをする。学級では、「見つめようわたしたちの『食』」というテーマで米作り体験を中心としながら、「食」の安全や文化、環境との関わりなどについて学習している。そうした学習との関わりの中で、各自がテーマを設定し、1か月余りの期間の中で、計画的に資料を収集する。資料は、地域の図書館や学校図書、リーフレット、インターネット等を活用して収集した。

新聞を書く紙は、A3版ケント紙にマス目印刷ソフトでマス目を印刷したものを用意した。今回は、横27字、縦40

字、計1080字で、原稿用紙2枚半分の文字スペースを確保した。また、相手意識、目的意識をはっきりさせるため、出来上がった新聞は、掲示をして友達や隣接学年の児童に読んでもらったり、学習参観の機会を利用して保護者や米作りを指導していただいている方に読んでもらったりすることとした。新聞を書く手順については、単元の導入部での、新聞を読む活動を生かして、下記の点を指導した。

- ア 各自がテーマを決め、必要な情報を集め、割り付けを考える。
 イ 集めた情報の中から、記事にしたい情報を選び出し、見出しを考える。
 ウ 要約の学習を生かして、中心となる文を考える。
 エ もとになる情報のキーワード（大切な言葉）に線を引き落とさずに入れる。
 オ 記事のほかに載せる資料（図、表、絵、写真）の配置を考える。（※資料は、2、3個程度にする。）
 カ 紙面の制限（文字数、スペース）を考えて、下書きをする。
 キ 清書して、新聞を完成させる。

書き終えた新聞を見ると、ほとんどの児童が、限られた紙面の、限られた文字数の中で、中心となる文やキーワードを落とさずに書き上げることができた。【図4】は、K児が書き上げた新聞記事である。K児は、「昔のお米の食べ方」というテーマを設定し、図書とインターネットから情報を集めた。記事①は、「JAキッズ」（JAグループ福島）というサイトに掲載されていた、「お米の歴史」という記事の中から、必要な情報を選び出し、「米が伝わったころの暮らし」という見出しをつけてまとめたものである。また、記事②は、上記のサイトに掲載されていた情報と、図書資料「お米の歴史を調べよう」（ポプラ社）から、昔の米の食べ方についての資料を集め、「昔の米の食べ方」という見出しをつけてまとめたものである。記事③の「まとめ」では、記事①と記事②の要点をとらえ、自分なりに言葉を置き換えながら、自分の意見と併せてまとめた。

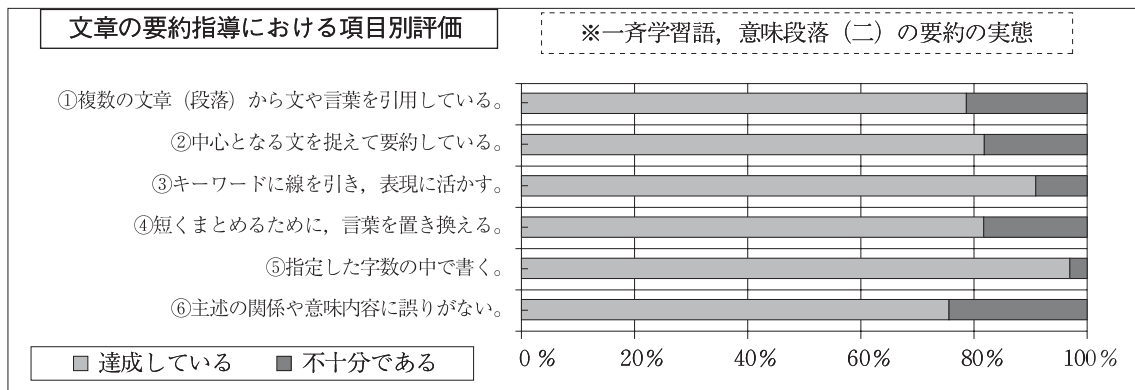
<p>昔のお米の食べ方（新聞タイトル） 米が伝わったころの暮らし（記事①） 米は、弥生時代から縄文時代のころに、最初に東南アジアや朝鮮半島や台湾から日本に伝わってきたといわれている。 その頃の人々は、まだ、狩りや木の実を採集しながら移動して生活していた。同じ所で生活して食べ物を手に入れることができる米作りは、人々の暮らし方を変えてしまうほど大きなものだった。 さらに、昔は、米がお金の代わりに使われたり、武士の給料に米が渡されたりしたくらい、米が貴重だったころもあった。</p>	<p>昔の米の食べ方（記事②） 弥生時代や縄文時代の頃の米の食べ方は、今の米の食べ方とはちよつと違っていた。古代の人々は、収穫した米をもみのまま焼いて食べるのが一般的だった。その次の時代は、土器を使って蒸したりして食べていた。 そして、だんだん精白の技術が進んで、白い米で強飯を作るようになった。強飯とは、現在のおこわのことである。当時は、もち米だけでなくうるち米も使われていた。また、昔は、おかゆも作っていた。おかゆは、お米から煮込んでやわらかくしたものである。</p>	<p>まとめ（記事③） このようにお米は、弥生時代から縄文時代のころから作られ、人々は、お米を工夫して食べていることが分かる。もみのまま焼いて食べたり、土器で米を蒸して食べたり、おかゆにして食べたりと、今とちがう食べ方をしている。今のように機械も電気もない時代に、こんなにうまく食べていたことにおどろいた。</p>	<p>〈記事を書くときに児童が活用した情報〉 ① お米なんでも百科「お米の歴史を調べよう」ポプラ社 ② JAグループ福島「JAキッズ お米の歴史」 http://www.ja-fc.or.jp/kids/rekishih.html</p>
---	---	---	--

【図4 K児が書いた記事】

5 考察

要点をとらえる学習では、形式段落の数を調べたり、目標の字数に合わせて短い文にまとめたりといった、作業内容が機械的で分かりやすいものについては、あまり躓きは見られなかった。しかし、中心となる文を見つけたり、キーワードを絞り込んだりといった段階については、読むことが苦手な児童ほど、時間がかかったり、判断に迷ったりする様子が見られた。そうした場面では、全体で話し合う場を設定し、それぞれの文の役割を考えさせたり、形式段落内の主語と述語から見つけさせたりといった読解のための「視点」を与えることが効果的であった。また、一斉指導場面では、児童が実際に書いたものから典型例としていくつかの例文を選び出し、模造紙大にして提示することで、自分のまとめ方と友達のまとめ方を比較・検討したり、よりよいまとめ方をしたりといった意識を働かせることができた。このように、要点をとらえる指導では、一斉指導場面を設定し、「中心となる文」や「キーワード」を見つけるための視点を与えることが効果的であるといえる。

また、まとまった文章を要約する学習では、短くまとめるために文節のつながりや文末表現を言い換えて表現できる児童が増えた。形式段落で要点をとらえる学習を積むことで、まとまった文章の中から中心となる文を選択したり、



【図5 要約指導における項目別評価】

キーワードを決めて，決められた字数の中に，それを落とさずにまとめたりする力が付いてきたことが分かる。【図5】は，意味段落の要約指導によって，どのような力が高まったかを評価項目ごとに表わしている。全ての項目で8割前後の達成率を得ることができた。「中心となる文」や「キーワード」という考え方や，言葉の置き換え，中心となる文の見極めも，ステップを踏みながら指導を行ったことで，実際に活用できる力として身につけることができた。

さらに，本実践では，情報活用場面として，自分なりに設定したテーマに基づき，「新聞」形式による書く活動を設定した。要点・要約の指導との関わりという観点で評価すると，まず，言葉を置き換える力がついたことが挙げられる。単元導入段階では，そこに書かれている文や言葉をそのまま抜き出すことしかできなかった児童の多くが，新聞を書く活動の段階では，文節や文末を別の言葉に置き換えたり，「中心となる文」や「キーワード」に当たる言葉を選んだり，逆にそれら以外の言葉を省略したりすることができるようになった。また，要約の学習で，複数の形式段落からなる文章を要約する学習を積むことで，複数の段落から，自分が大切だと考えるセンテンスや語句を抜き出し，主述の関係を考え，与えられた条件の中で文章として表現できるようになったことも成果として挙げられる。

このように要点・要約の力を高める指導を積み重ねたことで，児童は，必要な情報を見分け，選び取る術を身に付け，それらの力を情報活用場面としての書く活動に役立てることができたと言える。また，説明的文章における，要点・要約の指導は，しばしば「機械的」「形式的」といった批判を受けがちであるが，情報活用場面と結びつけた単元計画を作成することで，「読む」目的が明確となり，さらには，「書く」力を高めることが可能となり，児童にとって必要感のある学習が展開されたことも，大きな収穫であったと考える。

6 今後の課題

要点をとらえたり，文章を要約したりする力は，段階的にステップを踏むことで，どの児童にも確実に身につけることができることが分かった。しかし，躓きが見られた児童の多くは，基本となる主語と述語の関係や接続語の働き，文末表現，段落相互の関係など言語に関する様々な知識や理解が不十分であった。それらの力を獲得するには，低学年段階から多様な言語活動をとおして，繰り返し，螺旋的に読解力を高めていく必要がある。段階的・系統的に指導していくための計画作りや具体的な手だての在り方を，今後，検証していかなければならない。また，説明的文章を「読むこと」と「書くこと」との関連を深めた実践が多く報告されているが，今後は，意見文や説明文など論理的な構造の文章において情報活用力を高めていく指導のあり方について研究を進めていきたい。

〈註〉

- 1) 富永浩文「目的意識をもって追究し，相手を意識して論理的に表現する力の育成 ―問題解決的学習と「読む」「書く」繰り返し学習を取り入れた説明的文章指導を通して―」『教育実践研究 第17集』，2007年，上越教育大学 大学教育総合研究センター，pp.19～24
- 2) 白石範孝『要点・要約・要旨の基礎的学習で読解力を育てる』学事出版，2006年，pp.17～22

〈参考文献〉

- 大久保伸夫「説明文の読みの基礎基本」，全国国語授業研究会著『読解力を高める』東洋館出版，2005年，pp.124～136
 瀬川榮志監修，吉本清久編著『要約力を磨く説明文の指導』明治図書，2004年，pp.10～15
 吉川芳則『説明的文章の学習指過程をつくる』明治図書，2002年
 『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版，1999年，p.114